クラの植え込みがあります。車道脇にはツツジが春の花の香りを漂わせます。境内周辺の杉林は、松浦運動広場と接していますが、樹林の中には秋になるとアカメガシワが赤く染まります。

・乙姫神社（山形　久良木）

松浦町の主な神社の中で、女性を主神とするのは、提川の淀姫神社の与止日女命、山形宿分の豊姫神社の豊姫神、それに同じく久良木の乙姫神社の玉依姫命です。

古い歴史を物語る鳥井や石段を登った小高い所に鎮座する女姫神社へ詣で、南に視界を移すと、黒尾岳川を主軸にした田園と集落、それに八幡岳・眉山・城山などの峰々がパノラマ風に広がっています。

境内で目を引くのは、十数株以上にそびえるイチョウの大木で、幹まわり一、五二メートルもあり、毎年多くの銀杏（ぎんなん）の実を実らせる雌株（めかぶ）です。雄株は枯死して今はありませんが約一キロ離れた宿分の豊姫神社や松浦公民館の雄株の花粉の飛来による受粉と思われます。

大イチョウと並んでモミの大木が二〇メートル近くそびえていて、それと背丈を競い合うようにしてスギの大木が境内横に林立しています。

提川の淀姫神社などでも見られる、サルスベリは中国原産で江戸時代の渡来によると言われていて、盛夏時には桃色の花が古い鳥井

乙姫神社のイロハモミジ

を支える様にして咲きほこります。

境内から北面にかけて、イヌマキ、イロハモミジ、サカキ、ヒラドツツジ、サザンカ、アラカシ、ヤブツバキ、ミズナラ、スダジイ、シラカシ、ワジュロ、マダケ、メダケ、イスノキなど数多くの植生が見られます。

・淀姫神社（提川）

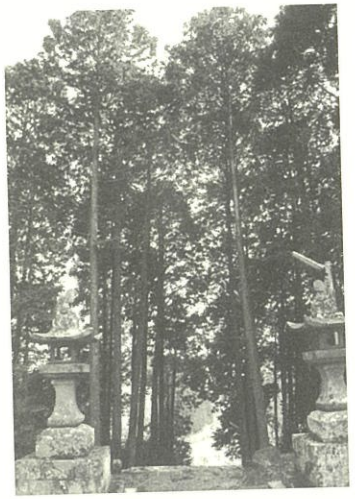
ヒノキ林を両サイドに参道を上ると、小高い丘に淀姫神社があります。囲むように四方スギの樹林で、二本は十数メートルの古木で神林の中心となっています。

拝殿は、他の例と同じように「流れ造」で藩政時代は、神社や山地は武雄領であったことが献灯の刻文からうかがえます。

境内には、昭和天皇御下賜の木碑が添えてあるクスノキやイチョウ、サカキ、サクラ、サルスベリなどの植樹がなされ緑いっぱいの丘です。

・藤川神社（山形　藤川内）

神社は、藤川内の北方の丘に明治二四年（一八九一）建立の鳥井を経て七〇数段の石段を上ると、うっそう



淀姫神社や藤川神社の参道を占めるヒノキ

と繁ったスギやヒノキの林が森厳をただよわせています。

境内の周りの木立ちは胸高一・五メートル位のスギの大木で溢れ、サカキ、イチョウ、イヌマキ、ヤマモミジなどの植樹がなされています。

神杜一帯の山は、スジダイやアラカシなどの古木、ネズミモチ、クス、ヤブツバキ、クロキ、アオキ、ヤマモモ、ミズナラ、イヌビワ、アカメガシワなど多種多様の木々が繁茂しています。

冬から初春にかけて松浦町のほとんどの山には、赤い実をつけた一メートル未満のマンリョウ、三〇センチ位のヤブコウジ、一〇センチを少し上廻るくらいのツルコウジなど同じ仲間の植物が、可憐な実をつけ、山歩きを楽しませます。

三、松浦川の生きものたち

私たちの生活や産業を支える自然の宝とも言える松浦川は、伊万里市、武雄市、唐津市にまたがる広大な流域を持つ大河です。本流は神六山や黒髪山を源流として八幡岳、眉山からの流れも合わせます。唐津市相知町山崎で天山山系を発した厳木川と合流します。さらに唐津市養母田では黒川、波多津、南波多、北波多方面からの支流、徳須恵川とも合流し、最下流は唐津湾に注ぎます。

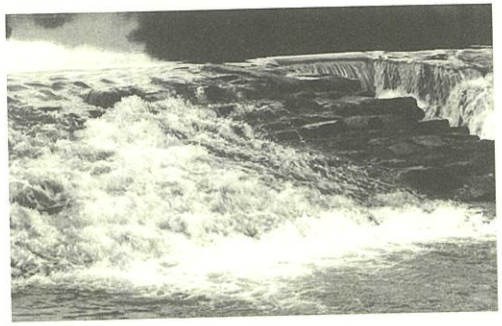
天山山系は主に火山岩の深成岩や変成岩の川床ですが、松浦川の支流では水源の頂点にある八幡岳、黒岳、黒髪山の上流の火山岩類を除いてはほとんどが第三紀層系の堆積岩である行合野砂岩層、

畑津砂岩層、佐里砂岩層の川床で、その岩質から風化した岩石に水草やこけ類が繁茂し、魚類をはじめ水中生物の良い住みかとなっています。

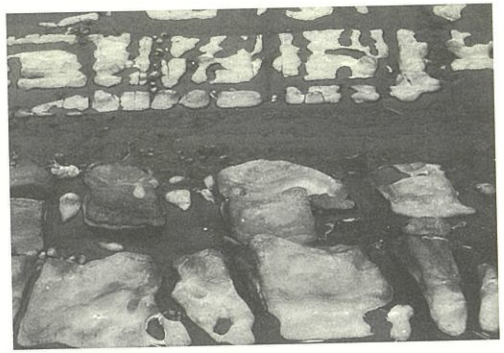
水源となる山は数百メートル以下が多く、山裾まで続く温帯性の樹林は清らかな中に適当な有機物を含むためプランクトンや水生昆虫それを食する魚類の住みかとして適しています。

農薬や家庭用洗剤、人口有機物などで河川の汚染も懸念されましたが、近年その改善や住民意識の向上によって、本来の清らかな水質をとりもどしつつあるのは喜ばしく、桃川の井堰など数年前と比べると水質判定の基準となるカワニナ（ホタルの幼虫の餌）も非常に増えています。

私たちの町を流れる松浦川の生き物には二分するものがあります。その区切りは、寛永一〇年（一六三三年）唐津藩初代藩守の寺沢志摩守広高の時代に二一年の歳月をかけて作られた大川町川西と川原の間にある大黒井手の十数メートル程の高さの井堰を境にしています。

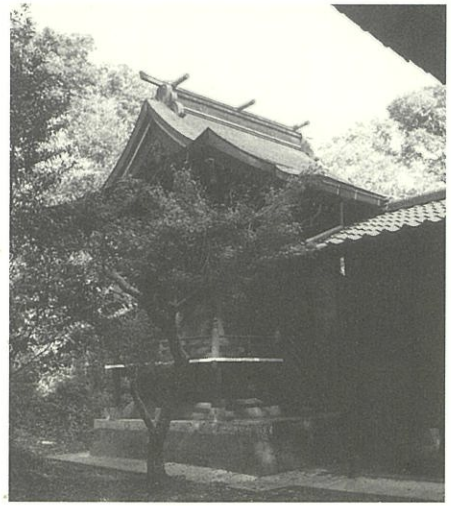


萩ノ尾の大井手、治水のため川幅広く斜面で魚道ともなる。分水して馬ん頭のサイホン式水道となる



黒尾岳川の川床、杵島層群の行合野層で縞（しま）模様の中を小魚が泳ぐのは優雅

七、藤川神社　山形　藤川内



◎祭神　伊邪那岐　伊邪那美の二神〈日本の国土や天照皇大神をはじめ神々を生成された夫婦神〉

◎例祭　＊夏季（祇園祭）七月二十五日
＊本祭り（十二月）には〝頭送り〟が行われます。

◎社殿　＊本殿は銅板葺流造
＊拝殿は瓦葺入母屋造

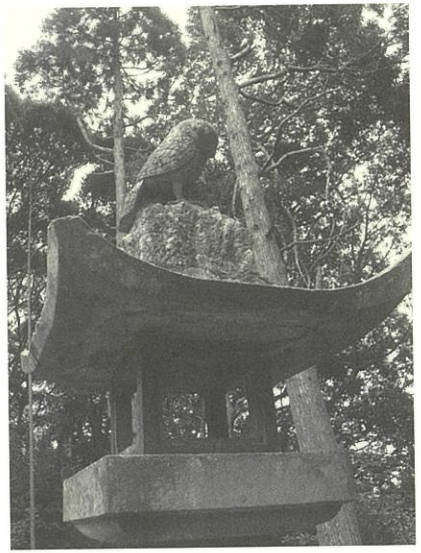
◎由緒　往時、今岳大権現の御分霊を勧請し、以来区民の氏神として崇敬されています。
現在の本殿は昭和十二年に銅板葺に改修されたもので、その時の改築費用の記録が残っています。（後記）
以前は毎年秋に神待（カンマチ）や三夜待講が行われ、区民の楽しい行事となっていました。
（民俗編参照）

◎奉納物　文化財等
明治二十三年（一八九〇）奉納の鳥居と燈籠が建っていて、燈籠の笠石には梟（フクロウ）の阿吽像が刻まれています。

珍しい燈籠ですが、梟になにかわけがあるのでしょうか。神社の周辺の森には昔からたくさんの梟が住んでいて、土地の人々はそれらを『神様をお守りする〝みさき（神使）鳥〟』と考えて刻んだのではないでしょうか。貴重な石造物です。
長い参道は四つの区間からなっていて石段は全部で七十七段築かれています。先人たちの造営の苦労がしのばれます。

資料①「藤川神社記　昭和四年十二月」
（原文のまま　区長保管書類）

一、藤川神社ハ大坪村今岳大権現ヨリ　往古分社シ　現在ノ社地ニ祭リ藤川内区ノ氏神トシテ祭レルモノナリ。其ノ後堂宇ノ建立ト伝ス。
一、同神社ノ祭礼ヲ毎年二回執行ス。夏祭ハ旧六月十日　秋祭ハ霜月ノ十五日トス。　大正年間旧暦廃止ニ付キ夏祭期日ヲ六月二十九日



笠石上の（ふくろう）像

明治23年奉納鳥居

金石原の観音菩薩　金石原の北側の山、村を見下ろす高台に大きなお堂があり、中に高さ約三〇センチの半跏趺座の姿勢で坐す高麗焼の観音菩薩が祭られています。また両脇には石造の聖観音の立像と地蔵像に木彫の弘法大師像が安置されています。

高麗焼の観音さまは、別に子安観音とも言われて子授け、安産に御利益がある観音さまとして崇拝されています。

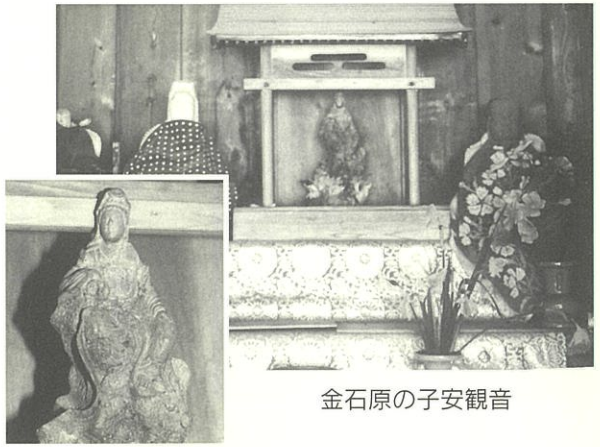
また、弘法大師も祭られてあり、春と秋の遍路巡りの伊万里新四国八八札所ともなっています。

上原の十一面観音　上原、字観音元の地名の起こりとなったといわれる観音堂があって、十一面観音の石像が祭られています。木製の蓮華座の上に高さ約五九センチの十一面観音坐像が載っています。

頭部は頂上仏面と周囲に十面の変化観音が小さく顔だけ並べて刻まれてあります。

普通、十一面の顔は前三面を慈悲面、左三面を憤

上原の十一面観音



金石原の子安観音

怒面、右三面を狗牙上出面、後ろ一面を大笑面に表わされて、各面は阿弥陀化仏を戴く宝冠をつけた、お頭の像であるはずですが、あまりにも小さいのではっきりしません。

姿は二臂の手で何かを持つ形ですが先端が破損しています。蓮華の入った水瓶と数珠を持っていたのではないでしょうか。お顔は人の苦しみを救う力を秘め、ふくよかな慈愛に満ちた優しさがあります。

この十一面観音は、造像の紀年銘は見当りませんが地名として残っているところから古い仏像と思われます。

藤川内の千手観音　藤川内神社と対峙して南の山上に観音堂があり、千手観音が祭られてあります。

観音さまの台座の左に、「施主　山形村大川内辰右衛門　新左衛門」、正面に「十六番千手　阿波観音寺」と刻まれています。

山形村（天保郷帳〔一八三四年〕では山方村）とあるので、明治初期以降のものではないかと思われます。区の存続簿には『昭和五年区有林の間伐を為し観音堂の改築工事を為したり』と記録があります。

この観音さまには、次の面白い伝承があります。

藤川内の千手観音

やちょっとした仕事は、ほとんど小若者の受け持ちでした。また、お日待ちの前日になると、もち米洗い、あんこ作り、宴会の準備等で大忙しでした。

当日は、日の出前に餅をつき、鏡餅にちぎって、残りは「あれつけ餅にしてみんなで食し、「うまか、うまか」と舌鼓をうったものです。その上、その日は仕事を休み、節句気分で酒食の小宴を催していたので、とても楽しい一日でした。

しかし、このようなお祭も、今ではいろいろな事情でその姿を殆んど見ることができないようになってしまいました。

十、神待ち

十月を「神無月」と呼んでいます。これは、諸国の神々が「出雲の国」に集り、どこの国も不在になるということから、このように言い伝えられたものと言われています。

町内では、ほとんどの地区が一一月二九日か三〇日に、この「神待ち」を開催していましたが、今では青年宿もなく、このような習わしは少なくなってしまいました。しかし、一部の地区では、有志によって継承され、往時を偲ばせている所もあります。

鏡餅を太陽に供える

藤川神社のいろり跡

当日は、境内のあまり風のあたらない適当な場所に、幔幕を張ったりして寒さをしのぎ、焚火で暖をとりながら、ひたすら神のお帰りを待って、酒を酌み交わしていました。地区によっては、神社の拝殿や床下に囲炉裏を作り、その跡が今も残されている所があります。

このことから、火を焚くということは、単に温まるだけではなく、一切のけがれを清めるという崇敬な村人の願いがこめられているように思われます。

また、長老の話では、「神様の御足洗い」や「お帰りなさい」のしぐさなど、興味深い話も多く聞かされます。

十一、熊野神社の本祭

(1)　第一日目　本祭り　一二月一一日　第二日目　小祭り　一二日

(2)　祭り組と費用

祭り組は、上分八組、中通り五組、金石原四組で、当番の順序は、熊野神社のある中通りから始まり、上分、金石原へと巡回していましたが、現在は、中通と上分が二年毎に当番を回すように変